その十二　大阪の家

夕方、名古屋付近のインターチェンジで渋滞に巻き込まれたが、思ったより早く大阪に到着した。疲れているが気はしっかりしている。と言うより、守（モリ）の言葉が道中ずーっと頭の中を駆け巡っていたから興奮しているだけ。美英子の事なんか、ふっ飛んでしまった。

そう、社員寮を出る決意に始まる一連の決心は固い。寮は黒馬（クロウマ）からの終着駅――そして一連の決意の始発駅。

長年住み慣れたモリ・PR・コーポレーションの独身寮に今、戻ってきた。軽量鉄骨造りの二階建て。部屋数は十。俺の部屋は一階で、六畳一間に押入れとミニキッチン。そんな自分の部屋の前に立つ。鍵を差し込もうとすると紙が貼ってあった。

「守（モリ）部長に電話してください。自宅、または病院……」

管理人のオバチャンが貼ったのだろう――紙を剥がして部屋に入る。冷暖房完備で、家賃五千円（もちろん水道光熱費は自己負担）は安い。汗が噴き出す。大阪は夜でも暑い。クーラーのスイッチを入れる。静かに作業をしなければならない。

まず押入れから布団を出して車に積み込む。そして数少ない衣服を積んでいく。次に割れたり潰れやすいものを蒲団や衣服に挟んだり置いたりする。車は瞬く間に満杯になった。まだ半

分以上残っている。

夜の大阪――大阪に限らず大都市では同じだろう、走る車はタクシーばかり。それに案外信号が明るいの初めて気付く。路上が赤く染まっている。ヘッドライトを消して青を待つ。

ふと助手席に積み込んだ本を見る。何か挟まれているので引き出してみる。チケットが二枚。「納涼怪談話・桂米朝独演会」――随分前に守（モリ）がくれたものだった。このようなチケットもモリ・PRがデザインするので手に入ることがある。

後ろからクラクションが鳴る。いつの間にか地面が青に変わっていた。アクセルを踏む。早く引っ越しを済ませたいので高速道路に入る。料金所のオッサンは暇そうに「おおきに」と通行券の半券をくれる。

「東山さんと一緒に」と貰ったのが、この落語のチケットだった。ここにチケットがあるという事はデートが失敗した証拠。

美英子とうまくいったら、夏子と結婚してもショックに耐えられると計算したのか。それは誤算。なぜなら気持ちというものは計算できない。それに美英子はクッションではなく針のムシロと言う印象が強い。いずれにしても俺は守（モリ）の小説の悲劇の主人公に仕立て上げられていた。

いつからか、守（モリ）の親切に違和感を抱き続けたが終わった。昨日、友情は完全に消滅した。いや元から存在してなかった。

＊

その十二　大阪の家

高速道路を降りる。暗くて道がわかりにくい。そりゃ、そうだろう――もう何年も家に帰ってない。やっと脇道に入る目印の電話ボックスを見つける。電話と美英子が結びついた。

――無事に帰れたのか

財布に十円玉があれば電話しようと決める。

――あった

複雑な仕方なさを抱きながら車を降りて蒸し風呂のような電話ボックスに入る。ふと腕時計を見る。

――十時か。止めとこ。それより引っ越しや

意味のない溜息をついて再び細い道を走る。やがてボロボロの平屋の家にたどり着く。しかし、懐かしい光はない。それに玄関の把手が回らない。

――もう寝たんか

「オヤジ、俺や、開けてくれ！」

何度か叩く。まったく反応がない。後ろの方で「ギギー」という扉が開く音がする。向かいのオバさん……何年も会ってないうちにお婆さんになっていた。

「まあ！　マモルちゃんじゃないの。大きくなったね」

「今晩は。ご無沙汰しています。オヤジ、出かけてるんですか？」

「それがね、心配で心配で。三ヶ月程前からずーっとお留守みたいなんで」

「エッ！？」
まだ残りの荷物もある。どうしたものか。やむを得ずオバさん立ち会いのもと、潰れてもいいから力を込めて把手(トッテ)を回す。すると難なく玄関ドアが開く。鍵はかかっていなかった。錆び付いていただけだった。
「まあ！　用心の悪い事！」
オバさんは腰を抜かすが、俺は「助かった」と思った。
「明日から、ここに住みますので、よろしくお願いします」
深々と頭を下げるとオバさんが喜ぶ。
「よかった、よかった。これで安心して眠れる」

＊

次の日の夜、用を終えた車を守(モリ)の手荷物と共に会社敷地の端にキーを差し込んだまま放置した。そして逃げるように会社を辞めて二ヶ月近くなった。連絡しなかったし、連絡もなかった。
社長が亡くなったという話しを聞いたのは随分あとだった。葬式だけはと思っていたがどうする事もできなかった。
残暑は息切れし、秋の風が木の葉に化粧を促すころ前期試験が始まる。それまで講義はもちろんのこと、夜間課程への編入や住所変更手続きもあって毎日のように大学へ行ったが、守(モリ)を見かけた事はなかった。

今日は俺にとって昼間課程最後の試験日。守(モリ)は最短の早さで単位を取っていたので残すは三科目（十二単位）。そのうち一科目が俺と同じでまさに試験が始まろうとしている。

講義室に入るが守(モリ)を捜すつもりはない。予想していた聞き覚えのある声が背中からする。

「二世(フタセ)。話を聞いてからでも、遅くなかったんでは」

守(モリ)が分厚い封筒を差し出しながら続ける。

「七月分の給料と退職金。上町さんらが帰阪する時、立て替えて貰った旅費。それに私物」

別に謝る事もないけれど、こう答えた。

「すまん」

「試験、終わったら……話を聞いてくれないか。駅まで送るから、その間だけでも」

守(モリ)は車で大学まで来ていた。

「……とにかく、試験済ませよーか」とだけ返事する。

これから歩む道が暗いとは言え、決めた事だから気迷いはなかった。

試験を済ませると俺の口は軽くなる。車の中では話を聞くどころか先に質問していた。慰めにはならないし返答の内容によっては立ち直れないほどのショックを受けると分かっていても。でも夏子の話になると守(モリ)は答えようとしなかった。守(モリ)独特の配慮と言えばそれまでだが。

すぐ六甲駅に到着した。今度は言い訳を聞くことになる。

「熊本で打ち明けようと思ったけど、西海(ニシウミ)（知秋(チアキ)）さんと別れたと聞いて切り出せなかった」

いよいよかと身構えるが、やはり夏子の「な」の字も出ない。
「西海さんか、東山さんとでも……とにかく、お宅が先に結婚したら、機を見計らって打ち明けようと思ってたんやけど……」
――知秋とでも、美英子とでも……先に結婚！
怒りが込み上げる。もう何もかもが終わり、何もかもが暗い未来へ着実に進んでいる。それでも知りたい事があるが、それが何になる！
――もういい！
「親父が倒れさえしなければ……もう少し時間が……」
「社長の葬儀に参列できなかったこと、申し訳なかった……じゃあ」
言い訳に徹する守（モリ）に俺は無条件放棄してドアを開ける。
「東山さんとはうまくいって欲しい」
「関係ない」
地に足をつけた。それでも守（モリ）は執拗に続ける。
「お宅の住所を知りたがっていた。黒馬から帰ってきた翌日……会社を辞めた日や。彼女から電話があった」
――そうか
少しだけ気が和らいだ。

「寮の電話につながらなかったようだ。さっき事務室で調べたら住所が実家になってた。教えてもいいか？」
「もう、ほっといてくれ」
未練を続ける守（モリ）にケリをつけるためドアを強く閉める。そのまま改札口に向かう。
――何故、素直にと言うか単刀直入に早く打ち明けてくれなかった！
でも打ち明けてくれたとしても結果は変わらないし受けるショックは原爆並みだっただろう。すると計算しすぎたやり方を除けば、アイツは配慮が行き届いたごく自然な行動を取った事になる。いずれにしても俺は何とか持ちこたえている。
そう思っても、様々な憶測が浮かぶ。アイツの過ちは夏子を好きになったと言う事だけなのか。いや、それより俺を傷つけまいとする身勝手なお世話が問題だったのか。しかし、原因が分かったところでどうにもならない。
美英子が俺を見直したとしても……傷ついた俺の心をどうする事もできない。とにかく鼻に付く守（モリ）のやり方は許せない。作為的に何とかしようとすればするほど気持ちは遠のく。こんな当たり前の事、何故わからないのか。やりきれない気持ちだけが残る。
ホームのベンチで守（モリ）から受け取った封筒を開けて驚く。会社に残した私物が多かったのかと思ったが、そうではなく百万円の束が三つも手書きの明細とともに入っていた。
「社内規程で退職金はあまり出せないが、烏来（うらい）の著作権で多額の報酬が入った。他にも立て替

えてもらったりしている。受け取りの証(アカシ)はいらない」

――手切れ金か

これで勘弁してくれと言うことなのだろう。守(モリ)にしても夏子にしても既に俺は邪魔な存在になったという事だ。

＊

「……の夕方五時に六甲駅の三宮行ホームの中央付近でお待ちします。その日がだめなら次の日も、その次の日もお待ちします。美英子」

一瞬、誰からの手紙かと思った。かなり間が開いていた。それにもう関心が薄れて俺から電話することはなかった。

とは言え、これまでもらった中で一番短い手紙を手にして、もちろん少し早いめに六甲駅に降りた。講義は六時からなのでいつもなら改札口に近い最後尾の車両に乗って五時一五分ごろに降りる。

今、四時五十五分。真ん中当たりの車両から降りる。そこにはベンチがある。美英子はこの電車には乗っていなかったようだ。それにしても「五時」を意識してホームに降りたのは……やはり好きなんだ。でも美英子の本心は分からない。

手紙が来たのは十日前で地方公務員の中途採用試験日の直前だった。美英子は守(モリ)から俺の住所のみならず夜間課程に衣替えしたなどの情報を手に入れたのは明らかだった。それは待ち合

わせの指定日が後期の講義の初日だったから。

――守（モリ）にそそのかされた？

俺は跨線橋を渡って、向かい側の大阪行ホームの同じ中央付近のベンチに座って向かいの三宮行ホームのベンチを見つめる。五時ジャスト。しかし、美英子の姿はない。

六甲駅は少し変わった駅だ。構内は複々線だが、変わっているのは真ん中の複線部は特急通過専用線になっている。その外側（海側）に三宮行の、反対側（山側）に大阪行の各駅停車の待避線がある。特急が気兼ねなく高速で各停を追い越すことができる。

三宮行の各停が向かいのホームに入線した。ドアが開いて乗客が降りる光景が電車の窓越しに見える。各停はホーム側のドアを開けたまま特急の通過を待つ。要はこの駅で特急に乗り換える事はできない。

「この電車は特急通過のため三分間停車します。発車までしばらくお待ち下さい」

やがて特急が猛スピードで中央の線路を走り抜ける。あっという間だ。しばらくしてアナウンスが聞こえてくる。

「大変長らくお待たせしました。三宮行各駅停車が発車します」

すると俺がいる大阪行ホームの構内アナウンスが流れる。

「間もなく、大阪行の各駅停車が六両で到着します。ホーム白線の後ろでお待ち下さい」

向かい側の電車のドアが閉まる音がする。そして本線に向かってゆっくりと走り出す。ホー

ムの人影をチェックするが、入線して来た大阪行の各駅停車が視界を遮る。
ブレーキ音がする。三分間の停車時間を利用して三宮行ホームの様子を窺(ウカガ)うために、乗客が降りるのを待ってから乗り込んで向かいのホームを見つめる。
電車が発車したばかりなので人影はまばらだ。美英子をチェックしようとしたとき、今度は俺がいる各停を追い抜かす特急が通過する。通過後、目を皿のようにして向かいのホームを見るが美英子は居なかった。
発車ベルが鳴ったので慌ててホームに戻る。最後尾の車両が過ぎ去るのを待つ。すると今度は向かい側に次の三宮行各停が入線する。これでは向かい側ホームの様子を確認できない。
跨線橋に向かう。跨線橋と言っても雨風をしのげる立派なもので、大きな窓から両ホームを見渡す事ができるがホーム中央までの距離は遠い。乗客は海側の改札口や跨線橋を渡って山側の改札口に向かう。待ち合わせする人を除いて、ホームに留まる人はほとんどいない。中央付近のベンチに座っているのはおかっぱ頭の女の子。美英子ではなかった。
次の電車まで待つか、思案する。ホームの時計を見る。もう一時間にもなる。手紙を真に受けた俺が馬鹿だった。改札口に早足で向かう。結局後期の講義初日から遅刻した。
何もかもが終わったような気持ちで大学までの坂道をとぼとぼと登っていく。守(モリ)だけでなく、美英子も去った。それにオヤジも。誰もかも消えた。